

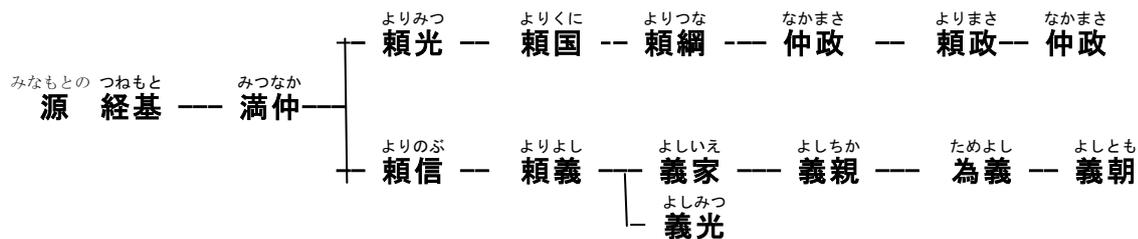
第12話 源三位頼政

清盛の無道があまりにも甚だしくなったために、これを憎む者が非常に多くなる。
 この機運を察して、源頼政が以仁王に平氏の討伐をお勧めする。しかし、忽ち陰謀が
 漏れて失敗する。

安徳天皇が位に即かれてからは、清盛の威勢は更に又一層盛んになったが、後白河法皇を鳥羽殿に
 押籠め、高倉上皇の御心を悩ませながら、しかも自分ら一族だけは思うままに驕りを極めているのを見て
 は、誰れがこれを憎まない者があろう。そこにもここにも平家に反抗する気持ちの者は殖えて来たが、
 なにしろ、その頃の平家の勢いは飛ぶ鳥をも落とすほどであったので、表に立ってこれに反抗しようとする
 者は容易には出て来なかった。

みなもと よりまさ
源 頼政

とはいえ、その機運は次第に熟して来ていた。
 その真っ先に立って、平家追討の口火を切ったのは源三位頼政です。



頼政は、源頼信の兄頼光の玄孫で、武略に長じ、弓の名人として聞こえていた。又、和歌も上手
 でした。嘗て宮中で鶴退治をしてから、武名が一時に現われたといわれる。

ぬえたいじ
鶴退治

それは、二條天皇の御代の事でした。ある年の夏の初めに、天皇が病気に罹れられて、夜が深け、人
 が静まる頃になると、俄かに物におびえて驚き叫ばれる。薬を差し上げても、神や仏にお祈りしても
 その効がない。夜中過ぎ—今の午前2時頃—になって、東三条の森からむくむくと起こった一かたまり
 の黒雲が、御所の屋根の上に覆いかかって、鶴という鳥の鳴声が聞こえると、天皇は必ずおびえ震えて苦
 しまれるのです。深夜で、殊に黒雲の中の事ですから、その形は分からないが何か怪物であろうという
 ので、弓の上手な者に射させることとなった。

その時、選ばれたのが頼政です。彼は弓矢を携えて御所に参上し、お庭に控えて、時の来るのを待
 っていると、果たして夜中過ぎに、例の一かたまりの黒雲が御殿の上に覆いかかって、どこともなく、ひ
 い、ひい、と鳴く物凄い声が聞こえる。けれども、折柄、真の闇夜のことでですから、どこを射るべきか
 の見当がつかない。心の中に八幡の神を念じながら、気を静めてよく見ると、黒雲は高く聳えて御殿の

第12話 源三位頼政

上に渦を巻いている。

頼政は矢を取って、その雲の真ん中を狙って射た。と、黒雲は揺れ立って、御殿の上を昇って行くように見えたが、その中から鶴の声が、今度ははっきりと聞こえたので、その鳴き立つところを狙って二の矢をひょうと射た。手応えがあったと思うと、御所のお屋根の上をころころと転んでお庭に落ちたものがある。見ると、頭は猿、体は狸、尾は蛇、手足は虎の姿で、鳴く声は鶴に似ている。全くえたいの知れない怪物であったといひます。

これが有名な頼政の鶴退治ですが、天皇のご病気もそれきり全快になったので、大層お褒めに預かったということである。但し、かような怪物が実際にいたかどうかは疑わしいが、こういう話の伝わっているだけでも、頼政が弓の名人であったことの証拠にはなるでしょう。



京都御所

源頼政の鶴退治

第12話 源三位頼政

げんさんみにゆうどう

源三位入道

さて頼政は、保元の乱の時には後白河天皇のお身方となって功を立て、平治の乱の時には、一旦は信頼らに勧められてその身方となったが、二條天皇が平家の邸にお遷りになったのを知ると共に、朝敵となるのを嫌って六波羅の攻撃には加わらなかった。そのために義朝以下の源氏が悉く亡びてしまった後も、独り都に住んで、平家と共に朝廷にお仕えしていたのです。ところが、平家の一族は、何一つ手柄のない小さな子供らまでが頻りに高い官職に昇って、位も進むのに、頼政はいつまでも正四位下に止まって、だんだん年を取るばかりでしたから、これを口惜しく思っ、ある時、

のぼるべきたよりなき身は木の本に 椎をひろいて世をわたるかな

という歌を詠んで、それとなく愚痴をこぼした。「自分には引き上げてくれる人がいないから、いつまでも四位のままで世を送らなければならない」という意味なのです。清盛はこれを聞いて憐れに思い、天皇に申し上げて、頼政を従三位にした。治承2年の時の事で、その時、頼政は75才でしたが、やっとこれで望みが足りたからと出家した。それで、世間では彼を源三位入道と呼んだ。

この頼政がどうして又、それから僅か二年の後に、平家討伐の急先鋒などになったのでしょうか？清盛に対しては、恩をこそ謝せ、怨みを抱くわけなど無い筈ではなかったか？それに入道して、年も既に77才という老齢になっていながら、どうしたのでしょうか？これには又、別にそのきっかけがあったのです。

名馬、木の下

頼政の子に仲綱という者がいた。東国の家来の許から鹿毛に黒のある名馬を貰ったが、いかにも良い馬で気に入ったので、容易には邸の外にも出さずに、「木の下」という名をつけて大切に飼っていた。

平宗盛がこの事を人から聞くと、仲綱の許に使いをよこして、その馬を見せてくれるように頼んで来た。仲綱は秘蔵の馬を取り上げられてはたまらないから、いろいろと口実を設けて断ったが、宗盛は断念しない。仲綱が惜しむのだと分かると、わざと1日に2度も3度も使いをよこして、是非とも一目見たいといった。ついには6度、7度も使いをよこす日もあったが、仲綱はどこまでも惜しんで、

こひしくば来て見よかし身にそふる かげをばいかが放ちやるべき

という和歌までも詠んで断った。

宗盛の愚、仲綱を怒らす

この事を聞いて、父の頼政は仲綱に、「どうしてその馬をやらないのだ？それほどあの人が欲しいというなら、金でこしらえた馬でも差し上げるべきだ。況して馬は乗るためのものである。邸の内にはばかり隠して置いては何の役にも立たない。早くその馬を差し上げるがよい」といって聞かせたので、仲綱はよんどころなく木の下を宗盛の許に送り届けた。

ところが、宗盛はこれを自分の厩に入れて、秘蔵して返そうとしないばかりか、仲綱が余りに惜し

んだのが憎いからとて、馬の体に仲綱と烙印をおさせて、木の下という名を呼ばずに、仲綱、仲綱とその名を呼んだ。そして客などがあって、この名馬を見たいというと、宗盛は大声で、その仲綱めに鞍を置け、仲綱めを引き出せ、仲綱めに乗れ、仲綱を打てなどと言って喜んでいた。

よりまさ きよへい 頼政が拳兵のきっかけ

この事を仲綱は伝え聞いて大いに憤った。自分の身に代えても大事にしていた馬であったものを、権威に圧されて取られたのさえ残念なのに、その上、自分が天下の笑われ草となるに至っては我慢がならないと、この由を父の頼政に泣いて訴えた。さすがの頼政もこれには呆れて、何をしても黙っていると、思えばこそ、悔って、そういう事をもするのであろう。その儀ならばこちらにも覚悟があると、固く思い込んだその折から、清盛が後白河法皇を押込め奉り、高倉上皇を御位から押しおろして、僅か3才の安徳天皇をお立てしたので、もうこの上は容赦ならない。国家のために平氏を滅ぼそうと決心したのでした。

しかし頼政は、これまで平氏を滅ぼそうとした陰謀がいつも失敗したのは、その中心となった法皇の近臣や公卿らが頼みにならない為であることをよく知っていたので、今度は、初めから武士の力で堂々とこれを討とうと考えた。しかしそれには、天皇を奉じている平氏に対抗するのですから、こちらもどなたか皇族の中で傑れたお方を頭に戴く必要がある。

もちひとおう れいし 以仁王の令旨

この時、頼政の心に第一に浮かんだのは以仁王でした。後白河法皇の第二の御子で、三条高倉にお住まいになっていたから、高倉の宮とも申した。賢明なお方でしたが、その御母の身分があまり高くなかったので、親王にもして頂けずに、侘しい月日を送っておられたのです。治承4年4月9日、夜が深け、人が静まった後に、この宮の御所へ源三位入道頼政が密かに参って申し上げた。

「君は法皇の第2の御子でありますから、太子にも立ち、御位にもお即きになるべきですのに、親王にもならずに、既にお年も30になられました。残念には思いになりませんか？ これは皆平家の計らいです。平家一門は、久しく豪華を極め、横暴の限りを尽して、もはやその運命も末になっております。

この際、速やかに義兵を起こして、逆臣を討ち、鳥羽殿に押籠められている御父法皇の御心をも安め奉り、君も御位にお即きなさいませ。これこそ実にこの上もない孝行であろうかと存じます。若し思い立ち遊ばして、令旨を下されるならば、喜んで馳せ参る源氏の兵は国々に満ちて居ります。」

こういって、頼政は諸国の源氏の名を挙げた。先づ京都には誰々、熊野には誰、摂津には誰々、大和には誰々というように挙げて来たが、殊に東国の源氏の名をば無数に列べ立てて、その兵力の遥かに平家に優っていることを明らかにした。勿論、その名の中には、伊豆の国に流されている義朝の子の頼朝もあれば、同じく義朝の末子で、陸奥にいる義経もあれば、義朝の弟の義賢の子で、信州の木曾にいる義仲もありました。

以仁王はこれを聞かれて、つくづくとお考えになった。なるほど、今の天皇は清盛の外孫であるか

第12話 源三位頼政

ら、平家^{よりまさ}がその後見^{こうけん}をしている。けれども、お政治^{おだ}は高倉上皇^{らん}がご覧^{らん}になっているのであるから、若し兵^もを挙げるとすれば、上皇^{よりまさ}と兄弟^{すす}で争う^すことになって穏やか^{しょうち}でない。殊^{こと}に保元^{せんれい}の先例^{せんれい}もあることだしと、頼政^{よりまさ}の勧め^{すす}を直ぐにはご承知^{しやうち}にならなかったが、嘗て少納言^{かつ}維長^{これなが}という人相^{にんそう}を見る事^{じやうず}の上手^{じやうず}な人が、「この宮^{みくらい}は御位^つに即^つかれるべき相^つがあります」といったことのあるのを思い出されて、さては御位^つに登^つるべき時^つが来たので、頼政^{よりまさ}がこのように申^つすのかもしれない。又、天照大神^{あまてらすおのみかみ}の御計^{はか}らいでもあろうかとお考^{はか}えになったので、乃^{すなわ}ち諸国^{おも}の主な源氏^{れいし}に令旨^{くだ}をお下^{くだ}しになった。その令旨^{れいし}には、東山^{ぐんべい}、東海^{ぐんべい}、北陸^{ぐんべい}三道^{ぐんべい}諸国^{ぐんべい}の軍兵^{ぐんべい}に下^{くだ}す。早く清盛法師^{じゅうるいはんぎやく}並びに從類^{やから}反逆^{ついでう}の輩^{ついでう}を追討^{ついでう}すべき事^{ついでう}。

こう初めに書いてあって、次には、「清盛^{いせい}、宗盛^{おうぼう}らが威勢^{おこな}をたのんで横暴^{いっかいちぞく}な行^いが多く、一家一族^{いっかいちぞく}のためには国^{ほろ}を亡ぼしても構^{かま}わぬようなわが儘^{まま}な振舞^ふいをして、民^まを虐^{しいた}げている。ことには法皇^おを押し籠^こめ奉^{ほう}り、多くの功臣^{こうしん}を漫^{みだ}りに罪^{つと}にして流^{こうい}したり殺^としたりした上に、皇位^{こうい}の事^とまで勝手^とにこれを取り計^{はか}るに至^{いた}った不忠^{ふちゆう}不臣^{ふしん}の罪^{つと}を述べた。かような平氏^{ふちゆう}であるから、今^{いま}、諸国^{しよこく}の源氏^{げんし}並びに藤原氏^{ふじゅう}の武勇^{ぶゆう}の有^ある者^{もの}に命^{いのち}じて、清盛^{せいせい}並びにその從^{よるとも}類^{ちやくちやく}らを討^うち滅^{めつ}ぼすのである。若^もしこの命令^{めいれい}に背^{そむ}くものにはそれぞれ^{それぞれ}の罰^{ばつ}を行^{おこな}い、手柄^{てしやう}を立てた者^{もの}はご即位^{しやう}の後^{のち}に厚^{あつ}くそれぞれの賞^{しょう}を賜^{たま}う」としてあった。又、伊豆^{いず}にいる源頼朝^{げんらいちゆう}には、源氏^{げんし}の嫡^{ちやく}々^{ちやく}であるから、別^{べつ}にもう一通^{ひとつ}の令旨^{れいし}が下^{くだ}された。それには早く大將軍^{だいしやうじん}となって京都^{きやうと}に攻^{せう}め上^あるようにと書いてあった。

この令旨^{れいし}は、義朝^{よしとも}の末^{すえ}の弟^{あに}で平治^{へいじ}の年^{とし}から紀州^{きしゅう}の熊野^{くまの}に隠^{かく}れていた行家^{けんかい}が、たまたま京都^{きやうと}に来ていた時^{とき}に仰^{おほ}せられて、諸国^{しよこく}の源氏^{げんし}に伝^{つた}えさせられた。

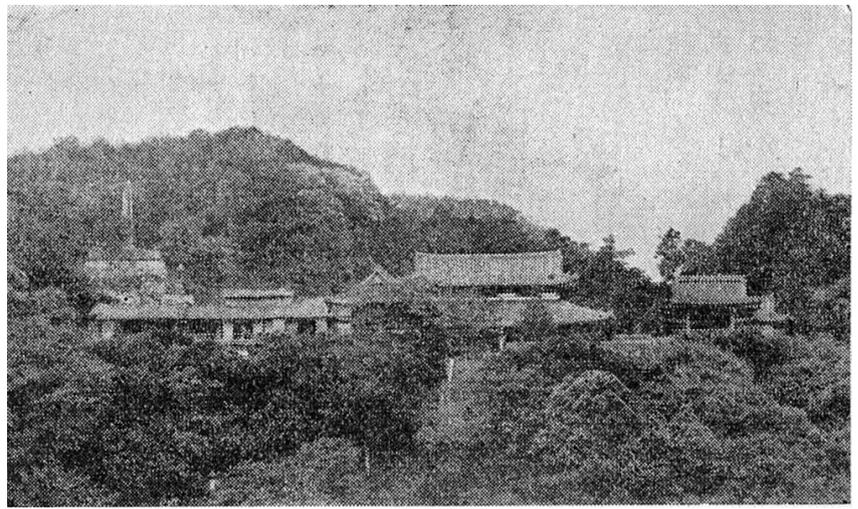
果たして機運^{きうん}は既に熟^{じゆく}していたのです。久^{ひさ}しく平氏^{へいし}の権威^{けんい}に圧^おされて、頭^{あたま}を上げることが出来^{でき}ず^ないた諸国^{しよこく}の源氏^{げんし}は非常^{ひじょう}に喜^{よろこ}んだ。彼^{かれ}らは行家^{けんかい}から王^{おう}の令旨^{れいし}を觸^ふれ示^{しめ}されると、響^{ひび}きの物^{もの}に應^{おう}ずるが如^{ごと}く、一^{いっ}齊^{せい}に振^ふるい起^{おこ}って、平家^{へいけ}追討^{おいうち}の軍^{ぐん}に打^{うち}立^たつ準備^{じゆんび}をしました。

頼政、三井寺に入る

ところが、この令旨^{れいし}の下^{くだ}った事^{こと}が早くも漏^もれて平家^{へいけ}の耳^{みみ}に入った。清盛^{せいせい}は大^いいに怒^{いか}って、以仁王^{もちひとおう}を捕^とらえて土佐^{とさ}の国^{くに}に流^{なが}し奉^{ほう}ろうとした。しかし、その首謀^{しゆぼう}者が頼政^{よりまさ}であるとは知ら^しらなかった^なので、頼政^{よりまさ}の子^この兼綱^{かねつな}を、王^{おう}を捕^とらえて土佐^{とさ}へ遷^{うつ}し奉^{たてまつ}る役人^{やくにん}の一人^{ひとり}にしたので、兼綱^{かねつな}は急^{いそ}いでこれを父^{ちち}の頼政^{よりまさ}に知^しらせた。

第12話 源三位頼政

よりまさ 頼政は直ぐに以仁王もちひとおうに知らせ、
 ともかく近江みいでらの三井寺にお逃げなさる
 ようにと申し上げ、その後あとから自分も
 いかいぞく ひき 一家一族を率かいて三井寺みついでらに駆け付け
 た。その頃、この三井寺みついでらや比叡山ひえいざんの
 えんりやくじ こうふくじ 延暦寺えんりやくじや奈良ならの興福寺こうふくじなどには大勢の
 そうへい 僧兵そうへいがいて、盛ぶいんに武威ぶいを示していた
 ことは既に述べた。頼政よりまさはこの僧兵
 みかた う らを身方みかたにつけて、都みやこの平氏へいしを討うとうと
 したのであります。



滋賀 近江みいの三井寺おんじょうじ（園城寺）

この時、渡邊競わたなべきおうという頼政よりまさの家来おもしろが、一つの面白い話を残している。

わたなべきおう
 渡邊競

競きおうは、そのころ都で最も聞こえた勇士ちぼうとして、智謀よりまさもすぐれていた。頼政よりまさの家来おもしろの内うちで一二ともい
 われるほどの者ものでしたが、その住居すまいが平家の六波羅むらの邸あのすぐ裏うらに在あった。頼政よりまさは三井寺みついでらに赴おもむく時
 に、これを競きおうに知らせると、若し平家へいに悟さとられてはいけないと考えた。競きおうには知らしらずに置おいても、
 よりまさ ところ わ 頼政よりまさのいる処ところが分かれば、必ずあとからやっちがて来るに違ちがいなしと思おもい、彼かには黙だまって都みやこを去さった。

平家へいでは、頼政よりまさが以仁王もちひとおうの身方みかたで三井寺みついでらに行いったことが分わかると、競きおうも一緒いっしょに行いったであろうと見
 せにやっちがた。ところが、彼かは何なにの変へんわった様子ようすもなく、家いへに居いることが分わかったので、宗盛むねもりは不思議ふしぎ
 に思おもって呼よんで来きさせ、「頼政よりまさは三井寺みついでらに行いったというのに、なぜお前まへは行いかないのか？」と尋たずねると、「何
 の知しらせもありませんでしたから、知しらなかつたのです」と答こたえた。

宗盛むねもりはそんな筈はずはあるまいと言いうと、「これには訳わけがあります。実じつはこの間まからお怨うらみ申ます仔細しさいが
 あつて、それでわたしは捨すてられたのです。しかし、家来きたに親おしい者ものも大勢たいせいありますのに、私わたしに誰だれも知
 らせてくれないとは、よくよく主人しゅじんが怒いかっているものと思おもわれます。止とむを得えません。この上あは跡あと
 追おって参まることも致いたしますまい」と言いった。

宗盛むねもりはこれを聞きくと打うち領うなづいて、「この後ごはこの宗盛むねもりに仕つかえよ。頼政よりまさがしたほどの事ことはこの宗盛むねもりが
 必ずしてやる」と言いった。競きおうは、もともと宗盛むねもりなどの家来きたになる気きは無なかったが、こここで否いやというべ
 きではないと思おもったので、上うわべは有ありがたくいままに従したがった。宗盛むねもりは非常ひじょうに喜よろこんで、先まづ家来きたにした
 するしにと、最も大事だいじにしていた小糟毛こさすげという馬うまに立派くらな鞍くらを置おき、遠山とやまという馬うまをつくけて、その上くろい、黒糸
 おどし よろい かぶと そ 威おどしの鎧よろいに冑かぶとを添そえて競きおうにくれた。

競きおうは、その場ばは有ありがたく頂戴ちやうだいして自分じぶんの家いへに引ひき取とったが、日ひが暮くれると、妻つまや子供こどもは密ひそかに方
 ぼう た の 々に立たち退のかせて、家いへには火ひをかけた。自分じぶんは宗盛むねもりがくれた甲冑かたに身みを堅かため、例れいの小糟毛こさすげに乗のって、遠
 山とやまには家来きたを乗のせ、外そとに5人ごにんの家来きたをつくれて、一散いっさんに三井寺みついでらに馳はせつけた。六波羅むらでは、競きおうの家いへから火

が出たと知ると急いで人をやってみせたが、^{いそ}競^{きおう}はいない。さては欺^{あざむ}かれたかと宗盛^{むねもり}は地^ちだんだ^ふを踏んで、悔^{くや}しがって、「それ、追^{きおう}かけて討^{ぶゆう}て！」と命令を下したが、競^{きおう}の武勇^{ぶゆう}は誰も皆知^{おそ}っていたので、恐^{おそ}れて、後^{あと}を追^おう者は一人もなかった。

仲綱^{なかつな}、宗盛^{むねもり}に仕返し^{しかえ}をする

さて、競^{きおう}は三井寺^{まい}に参^{なかつな}って、仲綱^{なかつな}に、「木^この下^かの代^{まるぼうず}わりに六波羅^{むねもり}の小^こ糟毛^{かすげ}をこそ取^とってまいりました。差し上げます」というと、仲綱^{なかつな}は大^{かみ}いに喜^かび、その髪^{かみ}を刈^かって、丸坊主^{まるぼうず}にして、平宗盛^{むねもり}入道^{いどう}の五字^{ごじ}を馬^{うま}の体^{てい}に焼^やき付^つけて、都^{みやこ}に向けて追^おい返^{かえ}した。先^{まづ}に木^この下^かを取^とられた仕返^{しかえ}しをしたのです。

その翌朝^{よくあさ}、小糟毛^{こかすげ}は六波羅^{むねもり}の大庭^{むねもり}に帰^{かえ}っていた。宗盛^{むねもり}は「平宗盛^{むねもり}入道^{いどう}」と焼^やき付^つけられているのを見^みて大^{りつぶく}いに立腹^{りつぶく}したが、今^{いま}、以仁王^{もちひとおう}を始め^{よりまさ}、頼政^{よりまさ}や三井寺^{まい}の僧兵^{そうへい}までが一緒^{いっしょ}になって平家^{へいけ}を憎^{にく}むのは、第一^{だいいち}に、後白河法皇^{おごしろくはう}を押し籠^こめた為^{ため}であると気がつ^きいたものか、強^しいて父清盛^{たの}に頼^{たの}んで、法皇^{ほうわう}を鳥羽殿^いから出^いだし奉^{ほう}り都^{みやこ}にお迎^{むか}えして、八条烏丸^{やちじょうからすまる}の御所^{ごしょ}にお入^いれ申^ました。実^{じつ}に法皇^{ほうわう}は去年^{こぞ}の11月^{じゅういちがつ}から半年^{ごたんげん}の間^{あいだ}、人^{ひと}気^きもな^ないよ^うな鳥羽殿^いにご不自由^{ふじゆう}な思^{おも}いをされ^られていた^{ので}であります。

僧兵^{そうへい}の不信^{ふしん}

さて頼政^{よりまさ}は、三井寺^{まい}から使^{つか}いを出^いして、延暦寺^{えんりきじ}や興福寺^{きょうふくじ}の僧兵^{そうへい}にも王^{わう}の身方^{みかた}になることを承^{しょう}諾^{だく}させたので、彼ら^{かれら}と手筈^{てはず}を決^いめて、一^{いっ}斉^{せい}に平家^{へいけ}の六波羅^{むねもり}の邸^{てい}に攻^{こう}め寄^よせようとしていた。しかし、延暦寺^{えんりきじ}は平家^{へいけ}に買^{かい}取^とりされて約^{やく}束^{そく}を破^{やぶ}り、興福寺^{きょうふくじ}の僧兵^{そうへい}は準^{じゅん}備^びが遅^{おそ}れて容^{よう}易^いに來^きない^{ので}、いっそ、兵^{へい}は少^{せう}数^{すう}でも、夜^よ討^とちにすれば勝^{かち}利^りを得^えられるからと、三井寺^{まい}の僧兵^{そうへい}と謀^{はか}って、ある夜^{あるよ}、急^{いそ}に都^{みやこ}を指^さして平家^{へいけ}の征伐^{せいばつ}に向^むか^かった。ところが、三井寺^{まい}の僧兵^{そうへい}の中^{なか}にも平家^{へいけ}に心^{こころ}を寄^よせる者^{もの}があり、その出^い発^{はつ}がわ^がざと遅^{おそ}らされて、途^と中^{ちゆう}まで行^いくと夜^よがほのぼの^あと明^あけかけた。

「これでは夜討^{よと}ちにならない。この小勢^{こぜい}で昼軍^{ひるいくさ}では仕方^{しかた}ない」と、仲綱^{なかつな}は途^と中^{ちゆう}から軍^{ぐん}を引き返^{かえ}した。



奈良^{なら}の興福寺^{きょうふくじ}

頼政^{よりまさ}ら、奈良^{なら}に向^むかう

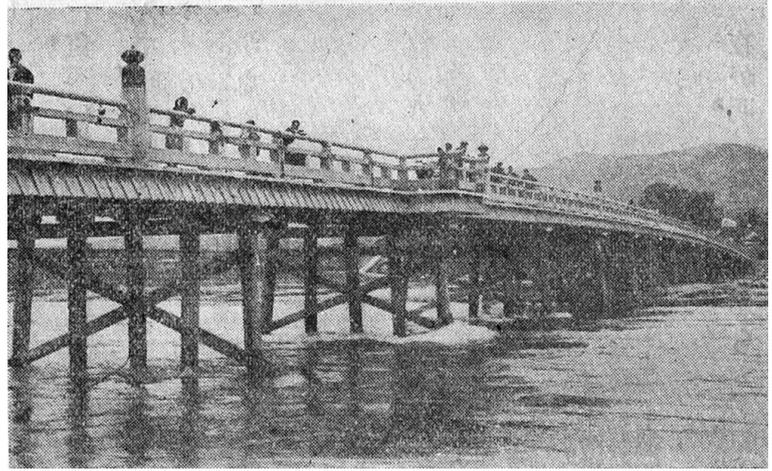
こんな風^{かぜ}で、迎^{むか}も三井寺^{まい}では安^{やす}心^{しん}出^い来^きそ^ううにもな^なくな^なったので、つい^{つい}に頼政^{よりまさ}は王^{わう}を奉^{ほう}じて奈良^{なら}に向^むかい、興福寺^{きょうふくじ}の僧兵^{そうへい}に頼^{たの}ろうと^した。ところが、その道^{みち}中^{ちゆう}で、宇治^{うぢ}まで^{まで}のわず^{わず}か三^{さん}里^りの間^{あいだ}に、王^{わう}は6^{ろく}度^ども馬^{うま}から落^おち^おら^られた。これまで馬^{うま}にお乗^{のり}りにな^なったこと^{こと}が無^なかったため^{ため}もあ^あったろうが、又^{また}、この間^{あいだ}から、ご心^{こころ}配^{はい}つづ^つきでよくお眠^{ねむ}りにな^なって

い^いな^なか^かったのもあ^あろうが、この大^{だい}事^じな時^{とき}である^{ので}に、馬^{うま}の上^{うへ}で居^い眠^{ねむ}りをな^なさ^さって^は落^おち^おら^られる^{ので}した。

頼政^{よりまさ}を^をは^はじ^じめ、これ^{これ}には大^{だい}いに困^{こま}って、ともか^{ともか}くも暫^{しばら}くご休^{きゅう}息^{そく}なさ^さる^{よう}にと、宇治^{うぢ}の平^{へい}等^{とう}院^{いん}にお入^いれ申^ました。

うじ たたかい
宇治の戦い

一方、平家の方では、王が奈良を指して三井寺を出たと聞くと、追っかけて討ち奉れやとて、清盛の子の知盛、重衡、及び弟の忠度らを大将として、その勢 20,000 余騎でこれを追い撃たせた。頼政は宇治橋の橋板を3間(5.4 m)ほど引き剥がして、王をお守りしている。平家は宇治まで来て、



京都 宇治 宇治橋

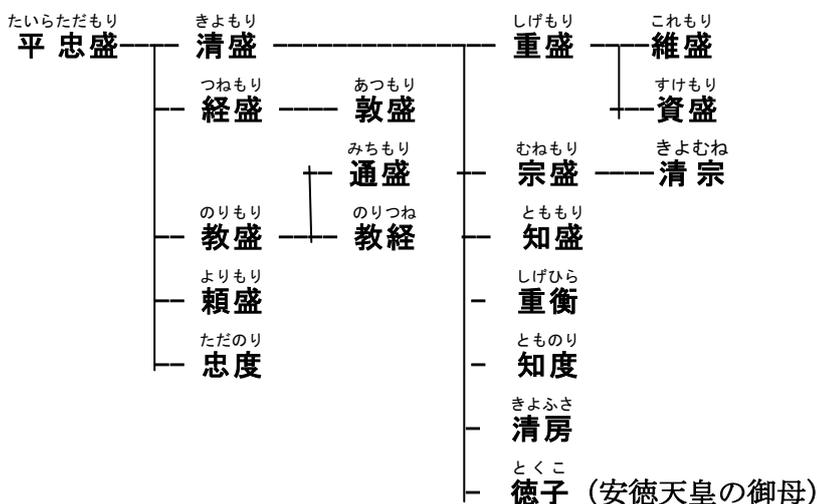
平等院に敵のいるのを知ると、どっと関をつくって攻めかけた。まだ明け方の事であるのに、上には川霧が立ち込めて、あたりは暗い。橋板を引いてあるとも知らずに真っ先に進んで来た平家の兵は、途中でそれに気づいて、「橋板を取ってあるぞ、橋板を取ってあるぞ」と大声で呶鳴ったが、後には雲霞の如くに押し進んで来るので、その勢いに押されて、先陣の200余騎は川の中に落ちた。

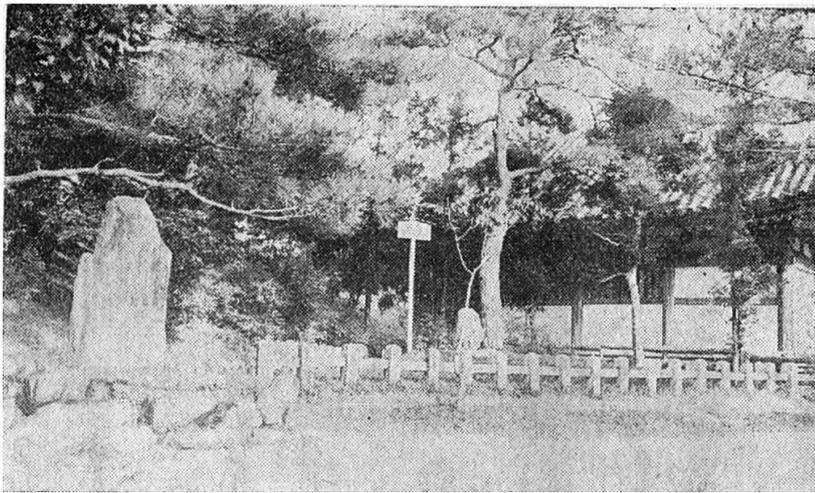
夜が明けはなれてからも、源氏は敵に橋をば渡らせまいと、大いに奮戦した。しかし、身方は僧兵を合わせて僅かに300騎に過ぎなかったので、多勢に無勢でいかんとも仕方がなく、ついに、平家の軍が流れを乱して河を渡って来るに至って軍は負けました。

頼政は子の仲綱、兼綱らと共に、敵軍を禦ぎ悩ましながら、以仁王を奈良のほうにお逃がし申そうと、お供をして落ちて行ったが、たまたま流れ矢に中って膝に傷を受けた上に、次男の兼綱が目前で討たれるのを見ると、

「若き子が討たれるのを見て、老いた親がいつまでも命を生きようと逃げて行きましょうか。ここで敵を禦いで居ますから、早く奈良においでになって、興福寺の僧兵をお頼みなされ。これがこの世の最後でございます。では、お暇を頂きます」

と王に申し上げて引き返した。王もお名残惜しくおぼしめして、お涙に咽ばれた。





宇治 ^{おうぎ} ^{しば} 扇の芝 (頼政が自刃したところ)

^{よりまさ} ^{さいご} 頼政の最後

^{よりまさ} 頼政はもとより弓が上手ですから、年は ^{じょうず} 取ってもさんざんに射る矢に一つも ^{あだや} 仇矢はない。平家の軍はたびたび射立てられて河端まで引き退いた。しかし、右の膝 ^{ひざ} も痛手であるし矢種も既に尽きてしまったので、^{よりまさ} 頼政は家来の肩にかかって馬から下りて、平等院の釣殿でついに ^{じさつ} 自殺した。

時に年は77才でした。

その時に詠んだ辞世として、

^{うもれき} ^{はなさ} 埋木の花咲くこともなかりしに ^{あわ} みのなるはてぞ哀れなりける

という歌が伝えられている。「自分は世に捨てられた身であって、一生、花の咲くような盛んなこともなかったが、最後は殊に哀れである」という意味である。今も平等院の境内には、^{けいだい} ^{よりまさ} 頼政の自殺した ^{ところ} 処だという「^{おうぎ} ^{しば} 扇の芝」がその遺跡として残っている。^{ちょうし} ^{なかつな} ^{みどう} 長子の仲綱もこの御堂に入って自殺し、その他の主なる家来も大抵討死するか自殺するかした。^{きおう} ^{はなば} ^{うちじに} 例の渡邊競も花々しく戦って討死した。

^{もちひとおう} ^{さいご} 以仁王のお最後

又、^{もちひとおう} ^{いったん} ^に 以仁王は一旦お逃げになって、だいが奈良の近くまで行かれたのですが、後から追って来た平家の兵の ^{なが} ^や ^{あた} 流れ矢に中って、ついに途中でお ^{とちゅう} ^{かく} 薨れになった。お年は30才でした。この時、^{こうふくじ} 興福寺からは既に七千余人の僧兵が ^{むか} お迎えに出発していて、その先陣は、王が ^{せんじん} ^{ながれや} ^{あた} ^{ところ} 流矢に中った ^{ところ} 処とわずかに50余町(約5.5km)しか ^{はな} 離れていないところまで来ていたのです。王にご ^{うん} 運がなかったのか、少しのちがいで ^{ついで} 遂に間に ^あ 合わなかったのです。その僧兵らは、王のお ^{かく} 薨れになったことを知ると、涙を ^{おさ} 抑えて、奈良に引き返しました。

(第12話 ^{げんさんみよりまさ} 源三位頼政 終わり。 次は前頁に戻り、 第13話 ^{ふくわらせんと} 福原遷都 へ)